

特
於 183
2

昔話 和妻表紙卷之二

江戸 山東京傳編

五 厄神の報恩

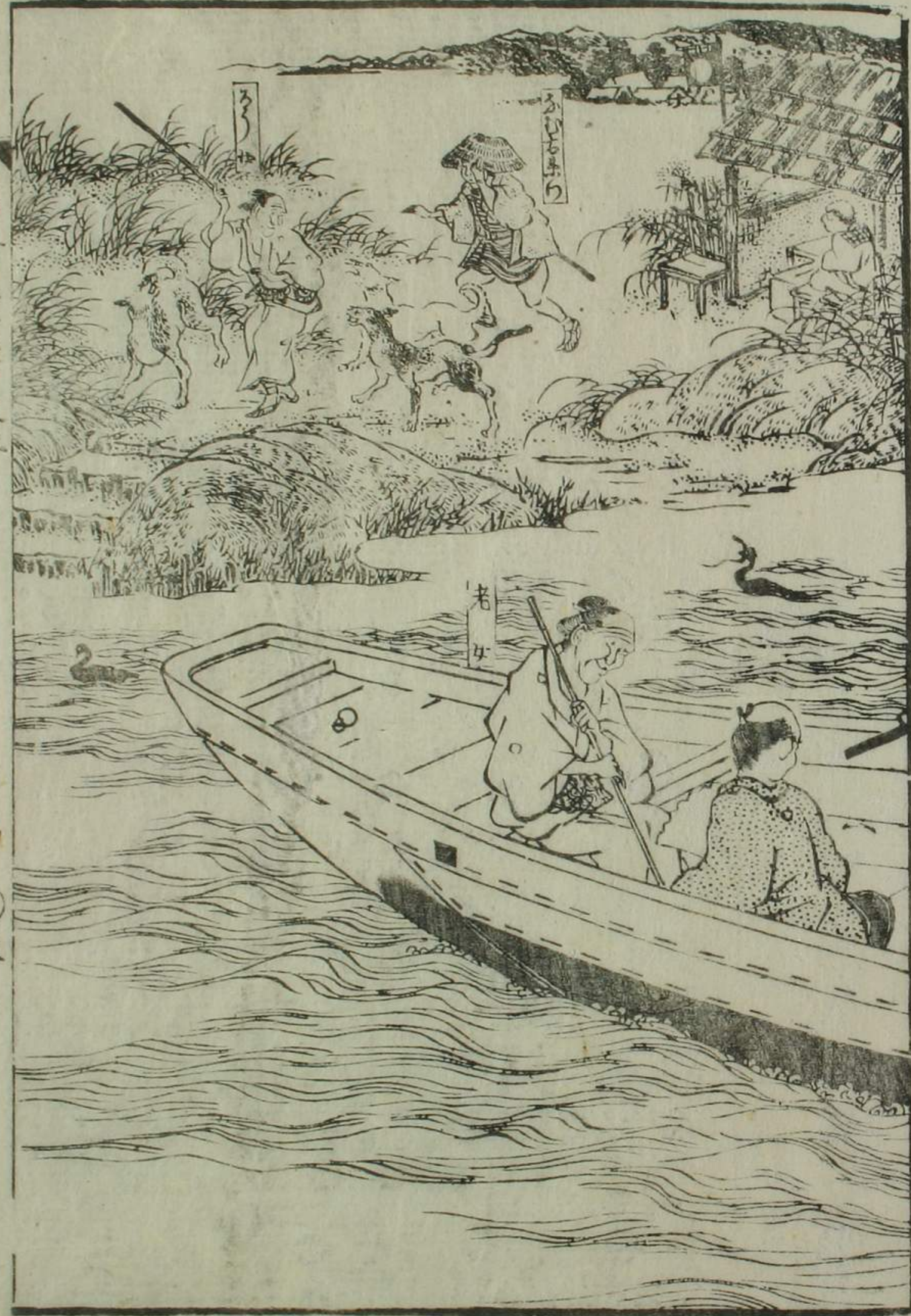
ねも 佐良良 三八郎の妻女子と異して丹波の國小つうの大江山の榎原
 ちの里の住ける少々の住りも日くの費小つひをそ別ありつひの
 便もかけれみぐう山畑とたか申。仕別ぬ業の辛苦たへを妻儀某へ
 當りて産ある蘭蓮と編市小ひささてりぐうの價ととり夫婦とも
 かせこふしてあ人の思多を三月権月日をおらぬ。志るる小三八郎
 おりて忠義のぬいひあが。深き藤波を殺せしゆ。うそくを
 不便なり。後小まば若殿御勘當をうけし。行方なくありまひつるは
 我心へくも藤波が非業の死も水の水の泡いふさきとあり。せうては彼か



山東京傳

冥福を得る種もと農業の片手も。念珠ともかさごとたえま
 念仏とも久けれ。里人異名とつめて。六字南無右あつとよびけるを
 みぐるも世と老ふ少ふも名なりと替りひて。つひ小実名と志たりけり
 さて又後くは。藤波を殺したる。金岡の筆百蟹の圖の絵巻物
 紛失し。長谷部の雲六と計りて。盗取たりと沙汰ありつは。盗人の
 立田の山小入て。抄りて。かぎりの撒たる名と得ること。宣耻さんや滑れ
 とも。盗泉の水と飲を熱も。悪木の陰小息をとくとまりのを。
 つらもして。かの巻物となご出。汚名をそぎ。びと忌ておのひ。一ツあ
 奸臣不破道犬が悪意を見あふ。て。お家の綱の根をたら。波は
 縁者小出令。て。恨のぬか。死後の名と清く。と。おのひ。ごめ。
 折く。面と。かく。て。大和の國小つ。或。京都小つ。て。便宜と。おのひ。ぬ。

かくて。ゆる。目。大和より。京小。木津川の。渡船小。船中。小。令の
 うら。一人の。老女あり。紅裏の。昔模様。の。小袖。小松は。菱の。紋つけ
 たる。と。さ。や。う。なる。色と。三輪。たる。腰。小つけ。細。竹杖。小。たり。たる。が。
 頭。佐野の。白亭と。乱。さ。る。身。うら。枯木。の中。小。瘦。が。た。た。人。品。と
 さ。み。で。賤。さ。る。紫。の。小袖。着。たる。女。の。船。中。小。わ。を。清。く。い。み。ま。さ。る。ふ
 さ。み。ふ。く。袖。を。お。り。て。小。お。ひ。く。片。を。小。ひ。ま。り。居。る。わ。さ。る。船。向。の
 岸。ふ。つ。南。無。右。の。衆。人。も。小。岸。の。が。り。の。老。女。後。小。お。く。さ。前。小
 と。み。く。行。け。る。小。は。時。紅。日。西。小。落。る。天。色。已。小。晚。ふ。ん。と。か。む。右。岸。の
 草。鞋。の。ひ。も。と。む。ぶ。ひ。ぬ。小。の。老。女。の。遙。小。行。過。たる。が。樹。木。お。お。ひ。か。う。て
 や。の。暗。さ。所。と。る。時。四。五。疋。の。犬。出。来。う。て。頻。小。吠。く。わ。と。く
 ら。ひ。け。ん。と。と。老。女。杖。を。お。げ。く。打。も。さ。る。も。お。れ。く。人。形。勢。あり。



六字南無右衛門
 木津川の渡り
 老女の危難を
 と〜〜

名古屋巻之二

六字ふむ右衛門

老女

かる難義と見え、てふむ右束の走りつと。たゞもと打ちして。老女と見え、
渾くおそれたる小や地ふたれ伏て息をたのげおれ。介抱しつゝ、さあぐ
さうりけふや。正氣ふあり。さうのあん方らあうされど。かる難義と救ひ
むるか、けあきよは。清恩かきよ。報きんんと。あう礼とのがれ。南無
右束の打す。さきり厚き詞をおもむふあふ。そのものふ京の
町まで送り行生あうさう。と。相伴ひ三条の四つは。東西南北去れぬ。
さて南無右束の一月さう。京都ふとまう。百蟹の巻物とあひけり。ら
その留主の万子栗太郎。時年八才ありしが。疱瘡とや。母磯菜が
辛勞おかかあう。と。疱瘡の神の棚をまうけ。赤幣束挾儀張子の達
磨木兔を。起卧小心をつけ。齒の頭巾と。金もるを。忌て隣家の
手と。紅火燭の朱と。む。紫の色は更あり。詞の禁忌火のりあ。

食物のさ。合まで。さう。小心を。ら。湯尾峠の孫杓子。鮮答。う。呪
か。よ。た。と。つ。ふ。さ。の。皆。仕。仕。して。着。病。ける。が。いと。あり。に。疱。瘡。や。熱。氣
つ。う。目。と。ひ。き。つ。け。今。も。た。え。い。つ。う。と。あり。ふ。と。な。く。あ。う。あ。く。出。痘
小。う。う。の。面。上。總。身。さ。さ。あ。も。あ。く。發。瘡。け。け。ま。が。く。て。今。も。危。し。
時。も。時。折。も。折。と。夫。の。留。主。あ。う。を。便。か。と。さ。う。ふ。せん。と。當。惑。し。
け。あ。や。あ。を。や。と。飯。う。と。待。佐。娘。楓。を。日。小。り。な。う。村。口。つ。う。て。う。が。ん
と。れ。と。飯。か。げ。な。ふ。ん。と。と。益。愁。ぬ。疱。瘡。神。の。機。嫌。わ。し。と。さ。あ。や。
栗。太。郎。足。さ。う。と。さ。う。さ。け。び。小。豆。枕。と。あ。け。う。人。形。の。腕。ひ。と。ぬ。さ。
か。う。て。あ。れ。お。う。さ。あ。ぐ。小。う。と。う。あ。う。さ。う。れ。と。泣。止。を。殆。り。て。あ。う。た。う
折。し。も。ふ。む。右。束。の。一。月。が。う。あ。う。家。ふ。う。磯。菜。表。ひ。出。む。ひ。て。ま。う。栗
太。郎。が。女。を。語。う。あ。も。あ。む。右。束。の。氣。づ。ひ。の。せ。が。う。く。中。が。れ。屏。風。を

栗太郎の足さうとさうさけび小豆枕とあけう人形の腕ひとぬさ

ひきあけて換子と見ると今まをあらまきけびてのめりたる栗太郎。かむちあつ
と見て礼正しく瘡をつら。手とつきてひける。いふ勢ひひけるをあらまか。
いふ家へおん身の宅ゆくは小兎おん身の子息ゆていふ。これに別の日津
川の渡場ゆく。危難と救たぬは老女ゆていふ。我実に疱瘡の神あり
が。我輩犬をおそくま又人ふこたり。我をそくく京都小あり。瘡瘡を
あらまめたる。四五日さ。當國小あり。おん身の家ともあらま。こ小宿し。
い小兎小つさ。瘡瘡をあらまぬ。元来は兎難症ゆく。今一兩日そ
これは落命とさ。あらま危急の節おん身飯宅したまひ。畢竟
は兎の命つた也。前日の厚意と報ふは時なり。我をみぬ
立まら。我をみぬは瘡瘡速小せあらま。平愈とさ。なり。いふをあらま
おん身の族の家ゆく。あらま。あらま。あらま。いふ。あらま。あらま。あらま。

おん身の姓名いふ。いとく。同ゆ。まむちあつ。その実名を告げぬ。あらま。い
ぬ。兎のうら小。あらま。三八宿と。あらま。つけ。瘡瘡小かけ。あらま。その月
あらま。あらま。我に勿論とも。あらま。の者とも。立まら。あらま。あらま。あらま。
あらま。あらま。あらま。栗太郎。即。同。絶。した。たら。あらま。あらま。あらま。あらま。
あらま。あらま。あらま。外。の。あらま。走り。あらま。あらま。失ぬ。礮。栗太郎。を
抱。たら。不思議。や。瘡瘡。俄小。せ。あらま。あらま。たら。あらま。あらま。あらま。
調。して。神。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。
三日出痘。三日起脹。三日貫膿。三日收靨。これ常教。あらま。栗太郎。が
瘡瘡。小。俄小。せ。あらま。あらま。全。く。の。神。の。た。け。あらま。南無。右。茶。つ。が
好意。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。あらま。



ふひえ
南無右衛門
一子栗太市
庖瘡を
やひ



栗太郎がのぞき平愈して救ふ方もあり。再又一つ火をいせきふけ。磯菜の夜灯とたて鏡小ひひて髪とさうあげつる。鏡のうら小飯波が顔ありくとうりておそろしきまかれればおふやといひく背後をくり見れば。魅のとき心火窓とてて飛ぶ家のひものわりあてがうと笑小色と磯菜いたぬらとのけま小たのれ。其後絶入ぬ南無右束つあつてあまき抱き起して醒薬をふへけふを。やうくいきうりけふ。これより心業日ぐ小うりて。ゆのものとまき色あをさめて瘦おころ。日小異小ありそら。息りもさうも見えど。ふむ右束つまひり。ま中も良薬をのろくさうさうと。さう飯波がいの顔目さ小。さう其交く小のさく。苦く。命もあやうく。又い時娘楓ハ十二才。栗太郎ハ八才あれども。兄弟をも小年小候と。さうい

かこき生まふ。殊更世間ふまれある孝子なれば。母乃病をさく。悲も兄弟枕方あふ。小つきをひて。志ちも病床をさるれば。さうぐりみささるあ。心を尽して。看病ける。病人あり。うら。一日もあつひとせされ。烟を立かぬる身なれば。せんさへ。あむ右束つ病人を兄弟乃子をも小あけおき。其身いたがや。ふ。出く。ワ。小日雇のあ。ひと得て。其日。か。心。苦。さ。つ。さ。あり。さ。ん。量。想。べ。し。夜。あ。れ。が。あ。む。右。束。つ。家。あ。り。て。看。病。を。れ。ば。兄。弟。の。子。も。笑。ひ。く。い。ひ。神。の。力。だ。た。の。ま。奉。り。し。り。外。さ。く。さ。い。ひ。あ。つ。せ。あ。う。手。と。む。さ。あ。ひ。毎。夜。完。太。吉。の。観。音。ふ。と。ま。じ。ま。つ。り。して。南。無。大。悲。観。音。菩。薩。我。く。が。一。命。と。さ。う。あ。ひ。何。い。も。母。乃。病。苦。を。救。む。と。祈。念。し。三。七。日。間。ま。う。て。ける。ふ。仏。も。孝。子。の。誠。心。を。

感^んト云ひける。不^ふや満願^{まんげん}の夜^よより。母^{はは}の病^{やまひ}中^{ちゆう}やおこる。二月^{ふたつき}をかりの
うち小^{せう}全快^{ぜんがい}。氣力^{きりき}かへりて。前^{まへ}よりもか不^ふ盛^{さか}ふある。誠^{まこと}是^{こゝろ}孝行^{こうぎやう}の
功^{こう}徳^{とく}大^{だい}なる由^{よし}ありし。

○孝子^{こうし}の物語^{ものがたり}のけいで。不^ふ記^きして。世^よの童子^{どうし}ふ。志^{こころ}ありとことあり。明^{あき}心^{しん}
宝鑑^{ほうかん}と云ふ書^{しよ}よ。我^{われ}親^{おや}は孝行^{こうぎやう}なれば。子^こも又^{また}我^{われ}は孝行^{こうぎやう}をかきと
りのかる。おのれ既^{すで}は不^ふ孝^{こう}なれば。子^こも又^{また}らんを孝行^{こうぎやう}らん。われ
孝順^{こうじゆん}なれば。又^{また}孝順^{こうじゆん}の云^いと。おあり。は。又^{また}疑^ぎしく思^{おも}は。誓^{ちか}う。點^{てん}
滴^{てつ}くと。流^{なが}る。雨^{あま}と。ろく。と。見^みよ。と。く。と。流^{なが}る。つ。が。と。た。く。と。つ。う。され。ば
我^{われ}父^{ちち}母^{はは}の老^{ろう}後^ごを安^{あん}穩^{えん}な。し。め。ば。我^{われ}も。又^{また}老^{ろう}後^ご安^{あん}穩^{えん}なる。と。疑^ぎか。
○又^{また}世^{せい}は。転^{てん}と。い。ふ。書^{しよ}よ。お。う。と。人^{ひと}の。子^こと。て。ん。身^みと。お。つ。ら。ま。て。と。と。し。も
父^{ちち}母^{はは}の。心^{こころ}ふ。そ。む。と。孝^{こう}道^{だう}と。つ。く。と。ま。あ。り。父^{ちち}母^{はは}身^みま。う。て。め。ら。む。

其^{その}靈^{たま}不^ふ對^{たい}して。存^{ぞん}生^{せい}ふ。い。ひ。お。れ。し。る。と。と。そ。む。く。を。か。し。む。と。
い。ふ。と。孝^{こう}道^{だう}と。つ。く。と。も。お。の。れ。が。幼^{ちゆう}少^{せう}の。時^{とき}。父^{ちち}母^{はは}の。愛^{あい}。心^{しん}
極^{ごく}之^の。恩^{おん}と。報^{ほう}る。と。あ。り。が。て。世^{せい}間^{かん}の。孝^{こう}道^{だう}と。つ。く。と。と。
あ。と。い。は。る。の。の。他^た人^{にん}の。小^{せう}兒^にと。言^いふ。あ。る。その。情^{じやう}愛^{あい}の。厚^{あつ}き。を。
見^みて。父^{ちち}母^{はは}の。苦^く勞^{らう}と。思^{おも}は。自^{みづか}悟^げこ。へ。と。つ。う。古^こより。孝^{こう}と。そ。し。
て。天^{てん}の。め。と。み。瓜^{うり}う。う。う。あ。ひ。の。立^た身^{しん}出^{しゅ}世^せして。高^{かう}祿^{りく}の。人^{ひと}と。う。
或^{ある}い。運^{うん}と。ひ。た。千^{せん}金^{ごん}と。得^え。富^ふ貴^きの。身^みと。あ。る。例^{れい}。あ。げ。て。あ。せ。ふ。
つ。く。と。又^{また}不^ふ孝^{こう}ふ。して。天^{てん}の。罰^{ばつ}と。う。う。病^{びやう}苦^く貧^{ひん}苦^くと。う。け。惡^{あく}
獸^ぶ毒^{どく}虫^{ちゆう}ふ。害^{がい}せ。れ。雷^{らい}ふ。と。れ。お。と。て。冰^{ひやう}命^{めい}ふ。死^しした。る。例^{れい}。
又^{また}と。か。か。し。む。と。され。が。幼^{ちゆう}少^{せう}と。う。孝^{こう}道^{だう}の。人^{ひと}倫^{りん}第^{だい}一^{いち}の。道^{だう}あ。て。
決^{けつ}定^{てい}の。役^{やく}儀^ぎと。い。ふ。道^{だう}理^りと。よ。く。い。は。ま。へ。て。少^{せう}し。も。父^{ちち}母^{はは}の

おふせとてむらど。朝夕茶敬おとくど。一生安穩ありしむらふ
心ぐとて又ぞし

六 因果の小蛇

かくて後々南無右弟の家内無事小打さける。一日ふむ右弟の
たぐ中へ小出けふ草むの裏より丈三尺まりの蛇とて墓とらへ
かぶくのみんとてむむ右弟と見て墓をたどけまかしく。いふ
蛇よ汝我のその墓とゆるせ。さあふ我娘と汝ふふとていひ
けふ小蛇いふとては入る体あて墓と放さる。その草深き所へ
入ぬさて農業ととりて家へ小ぬける。小其日の夜半の比娘楓俄に發
熱して苦しく。色たしく。まけまけ。両親おとらきて目とぬ。いそ
ぐしく抱起しとぬ。小蛇楓の腹小まきつと。かぬ首とたす。

舌と吐てらぬ。おそろふともおろる。かみ。磯菜とぬとぬて身の毛
いまだら。泣色小なりておく。取捨中てよといふ。かむ右弟のいそ。我昼かど
蛇墓と吞を見てたどけぬ。若墓を放中へ我娘とよふべしと
いひける。小蛇我戯を突くと来まる小疑か。戯言いをもきとあり。
凡蛇へ嬉心ありとのすとす。眼前小か。奇怪をえる不思議さ。と。
いひけ。蛇をひきとら。墓のらふ。推去。大に山の谷底小捨く
くりける。小其つぐ。夜うむ。楓發熱して苦しく。いひの間あまき。蛇
来りて。腹小巻つく。夏前のごし。かむ右弟の益怪。いひに殺しむらべ
と思ひ。蛇の首小視のり。よく首と碎く。いひに生くるのめと。恙て。いひに
蛇とて。平らる。石の上小おき。芥の脊とら。首と微塵よ
打さまける。血く不ると飛散て。傍小居る。栗太郎が。面上

かごとひうら。呀とさけびく倒きこり。かむ右糸の蛇と捨て抱き起せん
栗太郎が両眼小蛇の血ちとりたる様子あり。痛堪がこゝろ
かめささげぬ。磯菜もいとぎまぐひて介抱をうふ。志をいりり
かろく泣止けるが両眼ひくまわさる。とるく瞼たぐもれありぬ。
かむ右糸の死したる蛇を携へあき。遠所捨て去りけるが。いまご
くろごりきた小蛇又来々巻つてその如く。かむ右糸の糸とつら
けむの焼殺さやと。火中小投下けるが。志をいりりて火中と飛出ま
巻つきぬかきぬぐり。取捨んととれど。蛇の執念いほして。志を
とるれを後小せん。尽そ其終小あり。おさける。唯腹小巻つきたる
のこめて。別小害とふと受る。楓もそのあの子と我身もあつて
ありひけるが。後くは蛇小別とじみて。前生の因果とあはれ。かくりて

愛念深くあり。朝夕我食物をのらふ。養ひけり。蛇もくうして。食事
の時小いづれに懐より首と出でり。のらふぬ。楓栗太郎の蛇血乃
毒氣両眼小入て眼疾とあり。さめぐ療ととて。治しけり。つ小
生れもつぬ。盲目とをり。磯菜左小楓と志。右小栗太郎
と志。二人をつらく。觀つてのや。便るれ中も。形勢や。情の神仏や。
楓の世おたひる。姿養。藤小生れつき。たひ女御更衣小たり。も
もろく。かめ容儀より小蛇小見え。なれて人の交り。あぬ身とあり
栗太郎の生つきも。小心も。志をいりりて。かろくあり。ありひも
す。と。盲目とあり。と。殊更兄弟も。小孝な。あり。あり。に。
あ。と。かく。薄命。あり。け。と。や。い。る。宿世の因果。かく。火の
か。ら。る。吉。と。て。悲。歎。の。涙。む。せ。び。れ。が。兄。弟。の。子。と。あ。ら。て。あ。め。ま。



藤波が忠親
 小蛇のなうと
 南無右衛門
 楓の腹よ
 まゝひつ

名百屋巻三

左よりうつきて。北月を接ささり。共小涙をおこし。ほく介抱さる小いそぎ
悲しき。ゆらうけり。がむ右糸つ目を志いたさき。找つらくおりの小波が
怨念子ども笑とかわまし。我等夫婦小おひひとさせて。宿恨を
報る小うまひか。かれ一點の罪おく志て殺したれ。涙く恨も理なきを
三代相恩の主君のためせ。こころまじなひ子ども笑とさう殺さる
とも悔さ小あをも。磯菜歎か我ら少くも悲しめ。と歎き。心胸よ
おしからして。へ兄弟の子ども笑。いをそらへ。父へののさる。おらるる。
忠義のる小あまひ。其報とまげ。たも我ら身いつるの憂目
と見るとも。涙さるもいふ。まじなひも。母よ。涙くまげ。きたまひ。く。又も
上病をひき。い。むらりか。年小似合ぬ。理發の詞。孝心ふるき
けかげ。た。大丈夫のかむ右糸つも。胸ひくとおし。まじなひ。おらるる。おらるる。

涙を奉とらて。おし。ぬぐひ。歎を見せぬ。武士形。柔の心。うら。ありひ
中れて。おし。あまひ。かて。又。あまひ。く。月日と。あまひ。ける。栗太郎。盲目
のこ。あまひ。一生を。まじなひ。の種。小。琵琶を。まじなひ。琵琶法師
と。あまひ。のら。く。高官。小。まじなひ。貴人の。まじなひ。近く。め。さ。く。東も
あまひ。まじなひ。あまひ。まじなひ。生涯。安穩の。計を。あまひ。つら。まじなひ。
つぎ。頭を。まじなひ。名を。文弥。く。磯菜。をつら。く。京。小。お。其。比。音。曲
と。あまひ。名。高。く。まじなひ。沢。角。檢。校。の。まじなひ。は。は。て。は。な。まじなひ。母子。とも。小。奉。公
まじなひ。專。琵琶。と。まじなひ。まじなひ。

七 呪咀の毒鼠

扱も大和の國。仇。木。の。館。小。お。まじなひ。判官。負。國。子。息。桂。之。助。を
勘當して。後。銀杏。の。前。月。若。母子。と。平。群。の。下。館。小。移。せ。名。古。屋

三郎左衛門同山三郎父子と守役うて付おられぬ扱桂之助の繼母
 手の方といひ志毒悪くして。さて桂之助夫婦を小くす。いふ小もあて
 桂之助を失ひ實子花形丸と家督小せめか。と思ひ居けるが思ひしを
 桂之助勘當の身とありこれ心中ひそ小喜び。り又月若家督ふか
 こともやと扱へ。何とてこれ等母子を失ふたくなぬ。あうといふとも
 此等小の忠臣名古屋父子つきとひ居る。片時も心をゆるさぬ。いふ小も
 せんさあく打過ける。不破道犬奸智ふけま。蛇手の方乃心底
 悪意あると見ぬ。これ我大望をさるるに便りうと毎ひ一時
 手の方小近づき好意深き体小つひうて探うらるる。果して月
 若母子と失ひ花形丸と家督小。た望ふれば道犬とさうい
 何事も果小まらせめ下。なふさうひまうせんといひける。蛇手乃

かのめあうどまびぬかて道犬蛇手の方と密談し。先月若と呪咀
 とてさたさる。其比う呪咀の法をさ得る。頼豪院とよ修験者を
 ひそふまき。射物とおやよへたのけふ。貪欲深きものれば速
 ふらげひ。密室小とらりて修法小をせける。さるふ平群の下
 館小。銀杏前月若母子を人移住名古屋父子と守護して
 ありける。月若のこ。己小土才あをうける。さるふ月若偶上病をせ
 打卧。寝食安く。次第小瘦か。うへ良医をえ。び靈藥をよつる
 といふも。更小あうか。たぬ。眠る。これおびひるをさ。く。なり。
 珠更怪む。さ。深夜小。此。看病の男女おぐ。と秘あうを生じ。
 鼠お。出く。病床を飛め。後。登も。人をも。お。れ。を。さ。ふ。
 充滿。月若の髪乃毛を。肉をも。え。中。頭小毒瘡を。發して

痛堪はく心未日をおひておとくけり。母銀杏前歎悲しくおぼりて
かゝる神社仏閣小立願。名僧知識の加持祈禱をせしめんと
妖鼠ちやちや益怪まきそのおぼりけり。名古屋父子は昼夜病床を
見るに看病けるが。三郎左衛門山三郎小むひていひけるも。我
曾て酉陽雜組を見よふ人夜間小ゆあありして髪を失ふ者鼠ハ
妖あり。又鼠人おひ牛馬お着てりて昼夜避をいんともとるこあり
とつる。若君乃御容体をうがふ彼書小記を所の尋常の妖
鼠とゆふか。かゝるうづらうハ呪咀する者ありて障礙をかことおぼり
り。汝公をつけく怪異の出所を見ぬをいふと。いければ山三郎
某も尤もと思ひひぬれとく。これり別して心をいひ。寝殿の四方小
眼をうづらて守護しけり。さて一夜丑三つころ。銀杏の前をうづら

御手医者乳母侍女等もおびをねりて生トたる不思議や
犬拔群の大鼠行廊の方より赤く来る。形ハ常の鼠ちやちや
ども其おぼりて犬のうづらうを形勢なる。あふあやしやと
山三郎。刀を推へけりつえつと。瞬もせと見ぬるおの鼠。い
こみく若君の病床近飛来る。山三郎つとく立上り刀を抜
まらまらけりて。切小妖鼠を身とおぼりて剣を避り障子を
跡をうづらて。庭上小走り出築塙ろくお飛のびり。山三郎追うけるを
手小柄を抜りて。もう一打のあやうも鼠の額小ぞとたら。鮮
血たしくと流るるが。忽一道の煙をた妖棄立のびり。頼豪院が
姿髪髻をかゝる。山三郎とて。怪き曲者と思ひけり。おぼりて
頼額二と斬つる。頼豪院閃と身を避。平形金珠をおしめみく



佐々木
 桂之助の
 若君月若
 妖鼠の
 所為
 奇病と
 くらふ

名古屋巻

おとこ

むすめ



いて

名古屋巻

七

呪文をきくつらふれ。心暴風たれむ。庭乃樹木乃系をちりし。池水を
卷のげ。宿殿大震動。一。鳥洛々々々鳴らむ。今も崩れおも
ひれり。時小若君乃色。く。あふら。ちたれゆ。大勢乃色。く。て
泣悲。く。てあぬびと。す。ふ。さ。ふ。り。山三郎。那裡も象づへ。這裡も
去れを。あ。び。刀。を。打。ち。き。き。を。せ。し。が。頼豪院。乃。數十の。白鼠を
吐。その。崩山三郎小飛也。五体。く。て。も。く。か。れ。を。あ。か。は。お。殘念
と。ひ。け。又。さ。う。つ。て。ま。え。忽。小頼豪院。が。形。さ。く。や。く。唯。雲。霧。乃
と。ら。を。や。り。た。る。ご。く。く。く。あ。や。め。け。ぬ。庭上小只ひ。り。山三郎。拳を
あ。ら。り。齒。を。わ。き。ま。り。雨。さ。さ。と。あ。く。く。く。立。た。り。け。り。頼豪院。い。あ。り。く
身。を。の。れ。う。と。又。も。山三郎。が。忠義一圖。小精神。を。も。つ。ら。る。手
裏劍の。疵。治。せ。し。て。呪。咀。乃。法。忽。不。破。き。り。わ。か。の。く。く。若君乃

病日と追て。さ。あ。り。危。令。と。た。り。け。り

八 暗夜の駿馬

相も蜘蛛乃。頼豪院乃。佛法破き。月若快氣の。よ。と。ま。て。大に
か。と。お。く。け。う。へ。い。わ。る。計。と。り。く。く。彼。等。と。夫。ふ。き。と。乃。大。を。め。し。く
密談あり。け。ふ。奸。智。お。不。記。乃。大。少。も。屈。せ。を。再。又。一。計。と。生。じ。蜘蛛の
方。の。耳。小。つ。き。て。さ。ま。け。れ。蜘蛛。乃。方。く。と。す。と。れ。き。を。め。く。妙。計。あり
と。奔。ひ。ろ。り。て。重病。の。体。を。か。し。の。の。ろ。ろ。ろ。ろ。さ。ぬ。と。ろ。り。け。ま。り。判。官
貞國。大に。お。ら。き。乃。大。と。め。し。て。医。療。乃。を。相。談。あ。ふ。乃。大。す。り
け。い。真。方。の。御。容。躰。を。う。め。ふ。た。ご。ろ。あ。を。ま。じ。く。邪。生。宗。の。所。為。と
か。が。い。い。た。ひ。老。波。女。扁。鵲。が。神。方。乃。も。藥。乃。力。を。め。く。く。く。ひ
か。と。と。と。い。ふ。ふ。と。近。曾。京。都。乃。下。り。頼豪院。乃。小。修。験。者。

安部乃晴明が金鳥玉兔の神書と家傳し。ト筮小妙と得たり
のふいふかれとめし。てうらふらせ。おんまわれし。幸唯今某宅小あり
居いし。中も。貞國これとす。それのつとめ。めし。よと。おふせり。い道大
か。こ。こ。ひ。て。まて。私宅小ひつり。頼豪院の額乃疵中
中。癒。再。道。犬。が。計。ふ。く。じ。る。が。召。小。應。て。貞。國。乃。目。を。り。の
まろつてぬ身乃太た。く。眼中光る。斬髪をい。ら。の。の。こ。く。鬼
藤懸小紅紗の衣と着し。最多角の念珠を袖くみ。小持中。殿
乃扇を把のりも。ま。ま。を。ぬ。れ。金張付乃廣坐敷に。おめ。を。お。く。せ。び
坐し。る。体。誠。小。つ。つ。れ。悪魔とも。降伏と。ま。き。骨柄。か。る。貞。國。ま。が
初見の挨拶おる。奥方乃病体を告て。ト筮をえ。ま。け。る。小。頼。豪。院
恭く卦と敷下し。孝と施して。奥方乃御病氣。全く呪咀とる

者ありて。苦しめ。か。と。不。疑。か。し。今。四。五。日。と。過。る。バ。御。令。危。る。を。し。
若疑し。く。お。が。し。玉。り。御。寢。所。の。庭。中。良。の。隅。乃。土。中。三。尺。を。り。し。せ
見たま。り。分。明。あ。る。べ。し。と。小。負。國。羊。信。羊。疑。を。近。仕。乃。士。小。令。ト
玉。へ。近。仕。乃。士。か。し。と。小。つ。り。土。中。と。む。じ。む。小。果。して。一。合。乃。白。木。乃
箱。と。得。く。携。へ。来。り。貞。國。小。た。て。ま。る。貞。國。これ。と。ひ。き。り。乃。内。に
大小二つの藁人形ありて。ま。き。る。も。あ。く。釘。と。打。たり。貞。國。大。に。驚。を。
頼。豪。院。が。詞。を。奇。なり。し。これ。呪。咀。に。う。ま。ひ。な。け。ま。ど。別。小。一。物。も
ふ。け。ま。へ。何。人。乃。所。有。あ。る。や。分。別。を。し。し。これ。け。る。頼。豪。院。膝。を
と。め。凡。呪。咀。の。法。あ。へ。願。書。か。く。て。い。か。る。ひ。が。し。其。箱。これ。と。い。ひ。く
箱。を。取。わ。げ。つ。く。見。て。お。く。扇。乃。屍。と。り。箱。乃。底。を。つ。き。ぬ。き
ける。小。か。さ。の。底。お。く。て。其。う。ち。より。一。通。乃。願。書。出。り。貞。國。こ。ま。し。を



名古屋山三郎
 若君の寢殿
 宿侍一妖鼠
 半裏剣を打
 俄小暴風起
 寢殿
 鳴動

山三郎

若君の寢殿

とうひらき見れば蜘蛛の方花形丸。兩人を呪咀するの願文にて。銀杏の
 前月若兩人願主の名あり。あも浪杏の前乃自筆とあり。かき
 たり。さうさうもゆきを負國忽怒氣心頭ふおろ。面色変トて。
 あつゝこのもいさうけり。先頼豪院小呪咀をさしひのそく修法をれ
 けふより。蜘蛛の方の病床小壇をたぎりて。災穰乃法を修し。か
 藁人形の釘をぬき。護麻乃火中不投とて。焼とせり。かて蜘蛛の方。
 かり快氣乃体をか。負國小ひいていひける。妾をひめて銀杏前
 母子を實乃娘。實は孫といふ。何ぞ桂之助の勘當をゆ。し
 たまふ。さうさう月若と家督ふたまふ。か。そのそ宿願あるふ。
 か。ら。ら。ら。と妾と繼母といふ。さ。さ。若花形丸家督ふるともやし
 さら。ら。ら。妾親子を呪咀殺んとハ計いふ。ん。養廉怒りて心い

鬼よりか。お。さ。う。い。ひ。種。つ。の。妾。親。子。小。を。や。い。る。と。た。ぬ。り。
 尼法師ともか。い。ま。れ。し。我。く。か。て。あ。ん。づ。い。あ。か。ら。し。か。生。靈。亦。さ。う
 殺。さ。れ。ゆ。ら。あ。か。て。さ。う。妾。親。子。と。忌。ま。ふ。と。情。お。き。銀。杏。前。や。と
 つ。ひ。て。涙。を。滝。ら。ど。く。流。し。ぬ。け。時。花。形。丸。八。年。已。に。十。六。才。い。ま。さ。う。角
 少くありける。母の悪性。少く露やも。似。と。志。正。し。き。生。ま。さ。り。素。母
 の。派。王。と。あ。か。て。日。の。子。細。を。ま。て。大。小。歎。息。し。か。る。凶。執。乃。い。ま。ら。
 こと。皆。こ。れ。某。が。誤。り。檀。弓。篇。小。昆。弟。の。子。の。猶。己。子。の。子。に。似。て。つ。ら。
 某月若小對し。鄧伯道が。志。あ。れ。ゆ。な。う。と。泣。き。悲。し。け。り。
 判官負國蜘蛛の方の恨の詞。花形丸が。理。お。わ。き。詞。を。ま。て。銀。杏。前。
 母子を。並。ふ。く。親。と。呪。咀。さ。る。大。眾。人。片。時。も。な。け。母。を。し。し。と。黒。星
 眼。平。く。つ。あ。り。の。と。り。出。し。銀。杏。前。月。若。兩。人。の。首。打。と。ま。ま。し。く



賴豪院

修驗者賴古家院不破道犬よこのまに

妖術を施し毒鼠を化し

月若く殺んと近づき

名古屋

山三郎

半裏劍

頼次打まゝ真の姿はあつて

修法破る

命とけいれぬ手乃方道犬と頼見合志を命たりとありひあふ。これと
 ららひれども負國は入を花形丸の珠更小詞を法してそひききとも
 火性短氣の貞國少も宥免あうけいれひのよう道犬一味の黒星
 眼平迷惑教く其坐を退き君命とへとも。母子乃首うさんと
 いも。名古屋父子たやまの渡をまじ。ある時ハかれ等とも小打ん
 と母ひは。四五十人乃荒男等を引具して平群の館へついでゆく。
 嗚呼銀杏前親子の身乃うへ危あける次第なる。此古又も争く
 下館ふまへけいれ。名古屋父子大に驚き。三郎左衛門山三郎小
 ひひこれ正しく不破道犬が奸計く。姫君小ぬれ衣とおそ。御母
 子以笑んともりし不疑なり。打手乃ひらぬさだ某急を上館小うら
 一命小うてもカレひきまて。御命と救まらうせんとして。いそしく礼服を

悪く揚子小馬をひきせてひらりと打乗供人のそらふひぬもかき
心せぬ鹿藏とらふ下部小提灯のせ。走走んとあふふ。三郎左衛門が刀
鞘をくわへ山三郎も乗かゝる。雪づふふさきほ。親人御如在はる
まき。道犬の奸智抄なき者あはれがまを彼が計小おら。とも小
罪を得ぬふ。一言の詞も心をつけくつまへつて。三郎左衛門打
らふまき。それ合點あり。かゝると氣づくふ。吉又も水かゝる内乱ら
御側近き者等も油ひる。後唯御二方をよく守護とて。とて
捨て一鞭あて飛ぶとく。小走うゆ。山三郎身をそぞろで。かけぬゆ
まで見おかけら。折しも秘せぬる夕鳥いと悲しげ小鳴きま。か鳥
あはれのわしき。御二方乃御身乃とく。親人の身乃とく。つまじふも
われ。何を棄つと。いと吐息して胸をさびらる。なう。これと一世別

と。後小を思ひもさき。爰小又不破伴左衛門重勝の先女君命
と。いひらる。名古屋山三郎小草履をぬく。面を打きくと。ふく
遺恨小思ひ。笹野蟹藏。藻原三平。土子泥助。犬上雁八等。四人乃
者と。かきひ。夜く。平群の館に。迎返と。徘徊して。山三郎とつけゆ。ひ
け。い。夜も。六。辺小。悲ひ。来りて。う。ひ。ぬ。い。夜。宵。闇。と。空。の。と。り。り。て
星も。見へ。と。あ。ち。も。い。ぬ。暗。夜。あ。て。あり。け。と。三。郎。左。衛。門。藤。丸。小。提。灯
持。せ。馬。と。飛。せ。と。急。ぎ。来。り。と。伴。左。衛。門。等。五。人。乃。者。三。本。傘。乃
紋。つ。き。り。提。灯。を。と。り。て。山。三。郎。小。う。さ。ひ。か。し。と。思。ひ。物。蔭。り。一。回。小
抄。り。出。ま。り。提。灯。を。と。り。と。き。り。落。や。ば。麻。呂。花。を。と。り。一。腰。又。手。を
かけて。何。者。あ。り。や。と。と。じ。見。る。三。郎。左。衛。門。の。馬。を。と。り。と。い。は。け。斬。乃
曲。者。盗。賊。乃。所。る。が。い。ひ。け。肩。衣。を。ぬ。の。け。刀。拔。ち。馬。を。と。り

飛ぶるひもあやせど伴左衛門が斬つる白刃の稲妻目前に門
 此れ老功頓智の三郎九郎門馬のかけ小身と避る少せ伴九郎門
 刀のぶらぶら小鏡小やうきまうらもて火花をらと飛散たり暗夜とつひ
 木立をけき呀あれは二寸さたも見つけと藻屑三平土子泥助馬の
 脚音と心あてに前後よりきうつくる小目あてらひ思ふと兩人同士
 打ふ丁も打合と剣の下とさうぬけく三郎九郎門をくひきり小きう
 刀大上雁八が鼻のさたにえうれは胸ひきりそのけさうり伴九郎門
 心中ふけ時をさぶらう恨をさうきと思ひは息をきしてうかへ三平
 泥助雁八等もわうと揮りてまきう或へ互ふ同士打て薄手とあひ
 或へ木立小きうつけく氣とつら三郎左衛門今お果せまる大を
 かくさる身あれは好て戦心あく早くは場とつれをさうきくせけふも

四人の者ふかこまれてせんまぶあうひをぬくまうつくる刀三平が
 片耳とそぎ二の太刀小雁八が小指ときり落しれは兩人心臆しそ
 せううくさあさうさて泥助がさうらる刀はきりさた三郎九郎門が
 刀ふ丁と打合たひふくそと思ひは丁くさうと打合たり伴九郎
 その太刀音と心あてふ抜足して背後より勢とんと切つる刀あや
 まうと三郎九郎門が肩尖七八寸切らぬ痛半小屈せぬ強まると
 うさもさうと老人あれはなぐくさうらうとあや伴九郎門たみかけと
 九郎門服腹を淨く切られは三郎九郎門をくを一色呀とさうけびく
 尻居小瞳となあれより伴九郎門揮りより鬚つみくほらあせとささハ
 伴九郎門重勝さうさ山三郎汝君今とさうひうさうせん我と厚さ
 ころ眼骨離ふとさうて忘れがう今其仇を報るをさう懐中より



眼平

不破道犬

くもりの方

判官貝國

各古屋卷之三

不破道犬

蜘蛛の手の方と

銀杏の前

月若田子を

諷き

花形丸



物ふ包一草履のかたしと取出しこれ先年汝我を辱せり
 たる上草履あり。膽王ふこころよといひつ。連打ふ打けあを。三郎
 左衛門苦しげ息とつき。汝等へは切盗賊と思ひつふ。さてい
 伴左衛門あをありけり。我れ三郎九衛門るるといふ。さすて扱
 人たぐへせいかと伴九郎等二月ふおとらきたり。三郎九郎の刀はかり
 て立上り。兒子に仇をむらふもせよ。だまし打ら比良か奴我
 年こそ老れ名宗合の勝負るる。汝等とて此の鼠輩とも数
 十人来るとも物の数とわいの糸とも暗打せしむるといふ。武運ふつき
 たる身のをてよ。死る命の押かす福。唯心残りへ。二方穴安不口を
 家で相果るる。さすといひつ。うらむひまると伴九郎のまじりて。
 合破と蹴倒し。山三郎と思ひの外運乃とす。たるおひがれめ。山三よ

あぬい疎念ふれ。汝を打しも又此方不幸とせむ。こころあり。聞詰いさ
 ごとく死ぬじとあやむげふ。罪つ。あつと切小きり。三平泥助雁八等
 も。三郎九郎の苦痛の色とさるふ立上りて。すく小斬つけ。贈れや
 ふぞなくたりける。折しもちぐの鐘打交て。諸行無常と告げり。
 小田の蛙の鳴りて。いさ衣とさる。僕鹿藏の先程より。
 笠野蟹藏と海合。深田の中み踏みて。たひよ呼吸の息を
 心めて。戦双方薄手とおひらる。鹿藏三郎九郎と伴九郎の
 ついあふ詞を遙かばけけ。扱彼奴遺恨みより。人たぐへて。さや
 御主人と手よかけ。か仰天。蟹藏と捨て。主人のさる方へ
 探りゆんとさる。三平雁八のさると立ちあがり。兩人ひくく切け
 たり。藤花を丁とけり。又もゆんとしたる時。雨雲とれて一輪の

明月皎くとかやに出木の間とりのてきりありしに鹿を
 五人の影を見るふ伴たるをともし四人の者皆見えたりたるわの
 ぶかり。五人の者も鹿をいひて見たり下部の生おき後日
 ころまげなり。一同ふりまいてまうたに揃て切つる。勢猛鹿も
 双拳四手ふ敵一がく。いづく危く見ゆる。三郎左衛門が
 馬一色いきて荒ぶ。五人の者と踏たう一踏たふいけいけ
 五人の者へ大に狼狽もく。たつても見えたり。鹿を大に
 うら。金銀強りふ刀とまへ。四面八方とまりたる。五人の者一方の荒馬ふ
 踏ちしれ一方の鹿が死物狂ふきりたてし。つふ敵もく。あ
 つど。いらあー出して。処いも鹿を主人の敵のまじ申じとよがりつ。
 韋駄天走り追行り。折しもひふの方より。黒星眼平。四五十

人の荒男とわと引具。高挑灯と前ふたて。行列とつて林あそを
 払いて足がや木をみま。鹿をこれと見。正是上館の打手
 むんま。飯りて註進まき。彼等追て仇を報んり。心ハニワ
 身ハ一ツ。ゆて思案。かうて躊躇。かき所をな。あ
 わらひぬ。ぬ黒星眼平。時刻とら。平群の下館。ふせゆい
 これハ大殿の教令とわ。銀杏前。月若。親子の。首を
 たま。んぬ。ひ。たり。名古屋。父子。ハ。つ。て。み。あ。を。中。一。方。に。を
 べ。と。吉。た。う。ふ。り。け。れ。と。一。大。事。と。中。大。小。騷。動。し。名。古。屋
 山三郎。走出。其儀。先刻。為。館。ふ。告。る。者。あ。り。父。三。郎。左。衛。門
 御助。命。と。願。ん。た。先。刻。上。館。へ。ま。う。紙。一。張。が。候。り。ひ。ま。う。で。
 志。む。く。様。様。と。い。ふ。べ。と。つ。れ。も。果。ど。い。か。く。教。令。を。此。時。も



待と柵をめぐりて。若遠背におよぐ。其奥へ踏込て。御首打べし。返答
いふとつゝ山三郎あるは。是水におよぶ。其命おんかぎり。の
御二方と後をこと。まうるをどとつひはくたや身支交しと。こと
いで斬死をべき勢あり。眼平あざく。笑大殿の押入せ。北背く不忠
者先彼を打取と下知。それハ大勢一なる乱入し。山三郎ととり
かみ。火花とちりて戦う。ふらふ多勢山三郎ハ一人と又とも。
忠義とるとた太刀さき。小斬まうれ。をどうふらぐ。大庭まをころと
ひ。其ひぬ小山三郎。奥の殿またせまのり。姫君若君よひひ。父が
吉丸右うけたぬ。つらまご。一旦館をゆたらのき。あれうとつふふぞ。
月若の乳母柏木とら者。女うもわいじ。きりのあ。妾ハ若君とあがり
て。おちゆべし。山三郎の姫君と守護しと。ゆたらのたれ。かうとつと

かしく身支度し。若君とせまひ。長刀ハ小腰小ふと。後門より
行ぬ。山三郎ハ姫君と抱ひまわらせ。ついでに。れおんうた。を
後門おも打手のついののま。さうて。さへ山三郎。あやりのくく
よづりつ。多勢のうらみ。まりひ。て。生駒山のか。ぞおち。きけ
道犬ハ奸計の子細と。たぐ。偽筆の達人を。たる。銀杏前の
手跡と。見せて。偽願書と。か。味のりのと。て。庭中よ埋り
おきけり。ききつ

山三郎姫君と抱ひて。おちり。生駒山の林麓。は。堂におち。危難
あふ。つ。巻を讀得て。ま

卷之二終

